

ダンジョンでサービス残業をしていただけなのに

～流離いのS級探索者と噂になってしまいました～

4

◆著 KK ◆ill. riritto

ジュラ

野性味溢れる
脳筋探索者。

フォーマルハウト

人類殲滅を企てる
自称神。

蘭

情報収集が
趣味の
探索者オタク。

ヒバナ

日本探索者界の
絶対王者。

ジミ子

ブラック企業を
脱した探索者。

アゲハ

政府機関所属の
プロ探索者。

わたり ひなた
渡陽向

探索者ネームは「影狼」。
サービス残業のストレスを
ダンジョンで解消していた
ところ、凄腕探索者として
バズってしまった青年。

主な登場人物

俺の名前は渡陽向^{わたりひなた}。

サービス残業当たり前、鬼上司に扱^こき使われる日々を送る限界社畜^{しやちく}だった俺は、ある夜、ダンジョンで人気配信者シュガアを危機から救った事により世間で大バズり。

それを切っ掛けに会社を辞め、配信者——影狼^{かげろう}として生きていく事にした俺は、探索者スタイル《歌姫^{うたひめ}》のシュガアを始め、《猫暗殺者》のトーカさんや《猫戦士》のミケさん等、人気配信者達とも次々にコラボし、世界中に存在を知られていく事となった。

それに政府直属の対ダンジョン・魔獣特務機関、通称タイマとも契約する事になり、名実共に流離^{さよなら}いのS級プロ探索者としても認められた。

そんな俺が現在挑戦しているのは、日本のダンジョン探索者、その実力ナンバーワンを決める大会——KING OF DUNGEON EXPLORER——通称KODである。

歌舞伎町^{かぶきちょう}ダンジョンで行われた二次予選は、他参加者とタッグを組んでのチーム戦。

そこで俺とコンビとなったのは、ブラック芸能事務所《ヘイブン・ランナー》に所属する不幸な少女、黄泉^{よみ}のジミ子^こさんだった。

俺に敵意を燃やす若者——カガツチ、宝箱に並々ならぬ愛情を持つ人物——宝箱アケオ等、個性の強いライバル達と競い合いながら、俺は彼女と共に二次予選を圧倒的な記録で突破する事となった。

予選突破後、ジミさんはハイブン・ランナーの社長に、会社を辞め、独立する事を宣言。
憑き物の落ちた表情を浮かべるジミさんを見て、俺はかつての自分を思い出し、応援する事にした。

その後、ペットとして共に暮らす事になったフェンリル達と日常を過ごしたり、KOD絶対王者の天才少女——ヒバナとひよんな事からコラボ配信したりしている内に、遂にKOD決勝ラウンドの日がやってきた。

舞台は、都内最高難易度に認定された超危険区域、有明東京湾ダンジョン。

共に予選を突破したシュガアやジミさん達、そして、俺を尊敬し「王者にするためサポートする」と言う青年——蘭も仲間に加え、新たな冒険へと身を投じるのだった。

KOD決勝編

第一話 KOD決勝ラウンド直前

「さて……いよいよか」

KOD決勝ラウンド——開幕式。

豪華客船内のパーティー会場で行われた開幕式は、四十九名の参加者を各船艇に振り分けるくじ引きと、最高責任者多木さんの簡単な挨拶を経て、瞬く間に終了した。

そして、客船を出た俺達はそれぞれの船へと向かう。

船は全部で七隻。

自動操縦で目的地点へと向かうこの船に、四十九名が七名ずつに分かれ乗り込む事になる。

ちなみに、くじ引きの結果——俺が乗り込むのは第三艇となった。

「蘭と同じ船になったのは幸運だったな」

「ええ、本当に」

俺は、一緒に第三艇へと乗り込む仲間——蘭を振り返って見る。

彼も、くじ引きの結果俺と同じ船になったのだ。

「では影狼さん、ご武運を！」

「私達も頑張ります！」

「ああ、みんな頑張ろう」

シュガア、ミケさん達とは一旦別れる形となった。

「影狼。向こうで合流できたら、一緒に行動していい？ 絶対に邪魔にはならないから……」

「問題ない」

おずおずと尋ねるトーカさんに、俺は答える。

「もし出会えたら、共に行動しよう。俺は大丈夫だ」

「ほ、本当……!？」

「やったね、トーカちゃん！」

「約束ですよ！ 絶対に生きて会いましょうね！」

港にて、俺達は互いに健闘を祈り、別れる。

俺と蘭は、停泊する第三艇へと向かう。

「あ、か、影狼さん……」

「ジミ子さん」

そこで、ジミ子さんとも遭遇した。

先程のくじ引きで、ジミ子さんが引き当てたのは第二艇。

ちょうど、一つ隣の船だった。

「お、惜しかったです。あと一つ数が違ったら、影狼さんと同じ船だったのに……」

「こればかりは運だ。仕方がない。向こうで合流できる事を祈ろう」

「は、はい！」

ジミ子さんは、気合いを込めるように拳を握る。

「絶対に生き残って、上陸してみせます……!」

「そんなに気負う必要はない。そっちの船には、頼りになる実力者も多い。きっと助けてくれるはずだ」

「そうですね！」

そこで、いつの間にかジミ子さんの背後に立っていた女性が大きな声を上げた。

突然の爆音に、ジミ子さんも驚いて飛び上がる。

「め、メアリーさん……!」

「同じ船になって嬉しいですね、ジミ子ちゃん！」

彼女——自称・清楚系お嬢様探索者、鈴木メアリーローズさんは、ジミ子さんの手を取ってぶんぶんと振るう。

メアリーローズさんも、ジミ子さんと同じ第二艇になったのだ。

「よ、よろしく願います……」

「ふふふ、安心してジミ子ちゃん。運命に引き裂かれ、想い人と離れ離れになってしまったのはわたくしも同じ……! ジミ子ちゃんの気持ちは痛い程伝わりますわ……!」

「……ふえっ!? お、想い人……!」

「力を合わせて、モンスター蔓延^{はびこ}る魔の海域を突破しましょう!」

「あ、あの、別にそういうわけでは……」

「待っていてくださいまし、玄間さま……! 運命の再会を楽しみにしていますわ……!」

何やら楽しそうに叫んで、メアリーさんはジミ子さんと共に第二艇へと乗り込んでいった。

「んだよ、騒がしい奴等と同じ船になっちまったな……」

そこに、頭を掻きながらやってきたのは——カガッチだった。

「カガッチ……君も第二艇だったな」

「ああ、覚悟しとけよ、影狼。向こうに着いたら容赦しねえからな」

「わかった。だが、それは無事に上陸できたらの話だ」

俺は、カガッチの目を真っ直ぐ見据えて言う。

「その前に脱落するなんて、つまらない結果にはなるな。全力で生き残ってこい」

「……言ってくれんじゃねえかよ。上等だ」

カガッチは闘志の宿った目で俺を睨^{にら}み、微笑すると、意気揚々と第二艇に乗り込んでいった。

「上手く煽^{あお}りましたね、影狼」

「……本当は素直に『ジミ子さん達をよろしく頼む』と言いたかったが、俺が言って聞く奴じゃないからな」

俺に対抗心を燃やしているカガッチ相手には、ああいう言い方の方が効果的だろう。

ともかく、上陸まで全力で戦ってくれるならそれでいい。

「さて、影狼。そろそろ俺達も」

「ああ」

開始時刻が迫っている。

俺と蘭も、急いで第三艇へと乗り込む。



第三艇に乗り込むと、俺はドローンカメラを起動し、中断していた《影狼チャンネル》の配信を再開する。

ドローンにセットしたスマホの画面に、視聴者のコメントが流れていく。

〈お、再開した!〉

〈影狼と蘭は第三艇だったよな〉

〈まさかくじ引きで一緒になるとは……これが、赤い糸で結ばれたコンビって奴か……〉

「イエイ」

コメント欄^{らん}に反応し、蘭がカメラにピースサインしている。

お前、そんなキャラだったわけ？

まあ、それは置いて……。

「さて……」

有明東京湾ダンジョンへと向かう船の構造は、簡単に言うと漁船に近い。

搭乗した参加者達は、屋根も壁もないデッキの上に集まっている。

この船は自動操縦のため、操縦者もない。

俺は同じ船に乗った仲間——蘭以外の五人を確認する。

「や、影狼。同じ船になるなんて、最高だね」

一人目——ボーイツシユな見た目の女の子が、俺を振り返って嬉しそうに手を振っている。

KODの《絶対王者》——ヒバナだ。

「ヒバナ、いくら影狼と戦う事を望んでいるとはいえ、船の上でやり合うようなマネはするな。常識的に行動しろ」

二人目——黒髪の一部を白く染めた、クールな青年。

《シャイニーの風紀委員長》……だったか？

音夜だ。

「これはこれは、どうも、影狼さん」

「玄間さん」

三人目——は、顔見知りだった。

ドレッドヘアに、タイマの制服である黒いスーツ姿。

にこやかな笑顔を携える……しかし、油断ならない人物。

プロ探索者——第六部隊副隊長、玄間一巳さん。

「まさか影狼さんと同じ船になれるとは、俺は幸運ですね」

「こちらこそ。玄間さんと一緒に心強いです」

穏やかな口調だが、本心が見えない。

タイマの隊長である葉風さん曰く、この人は俺を敵視する派閥の人間。

二次試験では、その能力のほとんどもを見せる事なくここまで進出してきた。

密かに俺の実力を探り……何を仕掛けてくるかわからない。引き続き用心はする。

さて、この三人はここまで少なからず接触のあった参加者達である。

残りの二人は、完全に初対面だ。

「なんだあ？ みんな体がほつせえな。食っちゃまうぞ」

四人目——巨大な人物がいる。

身長は見たところ百九十近く、体格も良い。

伸ばし放題に伸ばしたような紅色の長い髪。

鋭い牙のような、真っ白な歯を見せ挑発的に笑っている。

性別は女性だ。

巨大……と表現したのは、その体の大きさに加え、野性的な雰囲気というか、オーラも手伝って

の事だろう。

「白垂^{はくあ}ジュラ。ランキング五位。以前お伝えした、優勝候補者の一人です」

蘭が俺の耳元^{みみもと}で囁く。

「白垂ジュラだ。相変わらずデケェな」

「俺よりもデカイ……」

「並大抵の男より……というか、並大抵の人間よりデカイだろ」

「日本人離れしたサイズ」

「前評判でも、パワーだけなら影狼やヒバナより上だって言われてるくらいだしな」

白垂ジュラ……そういえば、二次予選ではトーカさんと同じ会場に参加していて、タッグを組んだんだっただけ？

我が強い人物だと聞いていたが……なるほど、見た目からもその感じが伝わってくる。

「あ、お前、影狼か？ 影狼だろ」

そこで、白垂ジュラが俺を見る。

「あ、見付かった」

「ヒェッ」

「やばいぞ！ ダンジョン界限では、『白垂ジュラに興味を持たれたら、野生の熊^{くま}と遭遇したものと思え』って格言もあるくらいだし」

「猛獣扱いww」

「か、影狼なら大丈夫だろう、フェンリルも手懐^{てな}ける程だし……」

「お前のダンジョン配信、観^みたぜ。お前、強いな。ちつちええくせに。面白そうだ」

「はあ、どうも」

「オレと遊ぼうぜ？ どっちが多くモンスターぶっ倒せるか。喧嘩^{けんか}でもいいぞ？ でも島についてからな。海の上だと危ねえからな」

「……………」

……なんだか、人間の言葉を話せる大型犬と喋^{しゃべ}ってるみたいだ。

「駄目だよ、ジュラ。影狼はボクの相手なんだから。横取り禁止」

「なんだよ、ヒバナ。邪魔すんなよ。食っちゃうぞ」

「喧嘩はやめろ。既に配信も始まってるんだぞ」

何やら衝突を始めるヒバナと白垂ジュラ、それを呆^{あき}れながら仲裁する音夜。

一方、俺は五人目の同乗者に視線を流す。

「……………」

その人物は、デッキの端に腰を下ろし、他の参加者達が騒ぐ中でも微動だにしない。

フード付きのコートを着込み、頭をフードで覆って隠している。

顔はよく見えないが……おそらく瞑目めいもくしていると思われる。

寝ているのだろうか？

「彼がゴーストです」

蘭が言う。

〈あれ、誰だ？〉

〈ゴーストだよ、ゴースト。優勝候補ランキング三位だぞ〉

〈初めて見た〉

〈俺も〉

〈個人チャネルでも、ほぼ顔出ししてないしな〉

〈なんか、近寄りがたい空気が……〉

「ランキング三位。謎に包まれた人物……こうして本人を前にしても、やはり得体が知れませんね」

「……ああ」

だが……。

俺はゴーストを見る。

座ったままの姿勢で、全く動かない。

けれど、周囲に神経を張り巡らせて警戒しているような……そんな気配は感じる。なるほど、蘭の言うとおり只者ただものではなさそうだ。

「どうも」

とはいえ、同じ船に乗った者同士だ。

挨拶くらいはしておくべきだろう。

俺はゴーストに近付き、声を掛ける。

〈影狼がゴーストに話し掛けた！〉

〈勇気あるな……〉

〈いや、影狼だからこそ話し掛けられるんだよ〉

〈なんかドキドキする……〉

「影狼です。上陸するまでの一時的な仲間ではありますが、よろしくお願いします」

「……………」

ゴーストは、座った姿勢のまま微妙に顔を持ち上げる。

相変わらずフードで隠れて表情は見えないが、俺を一瞥いちべつした事はわかった。

そして、ペコッと小さく頭を下げたのもわかった。

〈ゴースト、ちょっと反応したなww〉

〈挨拶した……のか？〉

〈なんだこれww〉

〈もしかしてゴースト、意外と意思疎通ができる？〉

コメント欄の言うとおり、こちらから声を掛ければ反応を返してくれる程度には、コミュニケーションは取れそうだ。

俺は今一度、第三艇のメンバーを見回す。

俺の身内であり、協力者の蘭。

王者ヒバナ。

冷静な参謀さんぼうタイプの音夜。

タイマの玄間さん。

猛獣系探索者の白亜ジュラ。

正体不明のゴースト……。

へっというか、ちょっと待って？ 今更だけど、この船、優勝候補者ランキングの上位ベストファイブが同乗してるのかよ！ww〉

〈影狼、ヒバナ、ゴースト、音夜、白亜ジュラ……それに、影狼のサポーター蘭君に、Aランクプロ探索者の玄間さん〉

〈戦力が一極集中しすぎィ！〉

確かに、クセも強ければ戦力値も高いメンバーが集まったものだ……と、俺も思う。

〈まあ、俺は楽しいから良いけど！〉

〈同意ww〉

〈この船、見所しかなさそうだなww〉

〈実況掲示板も第三艇の話題ばかりだしな〉

〈俺はこの船の配信に貼り付けぜ！〉

『皆さん、お待たせいたしました』

そこで、デッキの後方に備え付けられたスピーカーより、実況の百舌沢もずさわハヤニさんの声が聞こえた。

『全参加者の搭乗を確認しました。これより、皆さんを乗せた船が有明東京湾ダンジョンへと出航します』



「うおおおお！ 見えてきた！」

「あれが、東京湾ダンジョンを囲う海上防壁か……」

「今更ながら、やっぱやべえ場所なんだな、東京湾ダンジョン……」

潮風を切り裂き、海上を進む船。

遠方に見える海上パーキングエリア——海ほたるを眺めている内に、俺達に乗せた船は目的地へと到達していた。

まるで城壁のように、海の上に浮かぶ金属製の柵。

この柵は東京湾ダンジョンを囲うように設置されたもの。

ここを越えた瞬間、その海域から東京湾ダンジョンの第一階層が始まる。

「他の船は見当たりませんね」

「それぞれ、大分、距離が離れたようだな」

蘭と俺は、周囲を見回しながら話す。

周りの海上に、他の船は見えない。

七つの入り口からそれぞれ上陸するという話だったが、結構離れ離れようだ。

まあ、今は他の船の事を気にしていても仕方がない。

「で、もう入っているのか？ この柵、ぶち破っているのか？」

「いいわけないだろ。自動で入り口が開く。それまで待て」

腕をグルグルと回し既に戦意全開の白垂ジュラに、音夜が呆れながらつつこむ。

彼の言うとおり、やがて金属柵の一部が門のように開いた。

俺達に乗せた船は、そこに入っていく。

柵は三重にできており、一枚目の門が閉じてから、二枚目の門が開く。

そしてそこを通過すると、最後の三枚目の門が開く。

「うおお、嚴重な作り……」

「ここから先はマジで魔界って感じだな」

「わくわく……」

「わくわくとドキドキが半分ずつ……」

「東京湾ダンジョン相手に、このメンバーがどこまで行けるのか楽しみだ」

『有明東京湾ダンジョン、第一階層、周辺海域に進入完了しました！』

三枚目の門が閉じる。

遠方には、小さな島が見える。

あそこが、東京湾ダンジョン。

スピーカーから、ハヤニさんの声が響いた。

『皆さん、ご武運を祈ります！』

瞬間、第三艇のデッキに搭乗する七人——全員の体がスパークする。

《換装》の光だ。

一瞬後、そこには探索者の姿と化した俺達が立っていた。

「影狼、早速ですが……」

「来るぞ」

蘭と音夜が、同時にそう発した。

俺も、既に気付いている。

遠方、海原を切り裂きながら、何かがこちらへと迫ってきている事に。

〈何かいきなり来た!？〉

〈うおおお、海棲のモンスターとか初めて見るかも!〉

〈俺、深海恐怖症なんだよな……〉

〈来るぞ来るぞ来るぞ……〉

「ジアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

瞬間、俺達の乗る船の真正面、海上に飛び出したのは巨大なサメだった。

何百、何千という牙が生え揃った大口を開けて、甲高い雄叫びを上げて飛来してくる。

〈サメだああああ!〉

〈いきなり映画みてえなのが来た!〉

〈馬鹿デカい!〉

〈嘘だろ、まだ序盤も序盤だぞ!〉

「影狼、いきなりギガマウス・シャークです。他のダンジョンなら、《下層》クラスのモンスターです」

「問題ない」

蘭の声を聞くと同時、俺は既に動いていた。

腰に佩いた二振りの愛刀〔沙霧〕を抜き、デッキの床板を蹴る。

【斑切り】

——そして襲来したギガマウス・シャークを、空中で三枚におろした。

〈影狼が行ったああああ!〉

〈ギガマウス・シャークが三枚におろされたぞww〉

「へいお待ちー」

「おいおいおいおい一撃だよ」

空中で切断されたギガマウス・シャークの体が、第三艇の上空を通過して後方に着水する。俺はデッキの上に着地し、前方を睨む。

「流石です、影狼」

「油断するな、蘭。来るぞ」

「ええ」

俺の隣に立つ蘭が、俺と同じように前を向く。

探索者コスチュームへの換装を終えた今の彼は、白いコートを纏っている。丈の長いコートを翻す姿は、さながら医者のようなだ。

《ドクター》。

それが、蘭のスタイルである。

「複数のモンスター達が、次々にこちらへと接近してきています」

蘭の言うとおり、突き進む船に向かって前方から海棲モンスター達が迫ってきている。

ぴょんぴょんと海上に姿を現したり、もしくは背びれ等の体の一部だけが見えたりと、視覚情報は断片的で把握が難しい。

だが、蘭の情報力と分析力を駆使すれば、何がいるのか見抜くのは容易いようだ。

「把握できた敵は三種類。素早い遊泳速度を持ち、海上の敵に弾丸のように飛び掛かってくる、鋭い牙を持った魚型のモンスター——弾丸ピラニア。体を高速回転させ手裏剣のように斬りかかってくるヒトデ型のモンスター——ソード・スターフィッシュ。特殊な歌声で幻覚を見せたり、洗脳をもたらしたりする人魚型のモンスター——セイレーン」

「え、この数秒間で、そこまで敵の情報を分析できたの？」

「蘭君、流石」

「海中を泳ぎ回ってる敵を海上から把握するなんて、神業過ぎない？」

「端的な情報から見抜いたんだろ。情報量の勝利だな」

感心するコメント欄。

そんな蘭の分析通り——海中から次のモンスター達が襲い掛かってくる。

「キシィィィ」

剣山のような牙を剥いて飛来してくる大量の小魚——弾丸ピラニアの群れだ。

「うわあああ、弾丸ピラニア！」

「弾丸つつつか、これもマシガンンの掃射じゃん！」

「なんで淡水魚が海にいらんだよ、ふざけんな！」

〈怒るっ！っ！？ww〉

コメントの言うとおり、群れで襲来してくる弾丸ピラニアは、正に機関銃の掃射に等しいだろう。だが、こちらには日本最高峰の實力を持つダンジョン探索者が揃っている。

「はっ！　なんだ、ちっちゃえ魚ども！　怖くねえぞ！」

白亜ジュラが哄笑を上げて、吠える。

換装を終えた彼女は、その巨体にピッタリとフィットしたボディースーツを纏ったような格好となっている。

弾丸ピラニアの群れは、真っ先に彼女へと襲い掛かっていく。

「弾丸ピラニアは人間を捕食します。餌として、大柄な白亜ジュラを優先して狙うのは自明の理」その状況を前に、蘭は冷静に呟く。

「ですが、彼女にとっては全く問題ないでしょう」

——刹那、白亜ジュラの伸ばした右腕が、変貌した。

大きく膨れ上がり、右腕は鱗に覆われた強靱な前足に形を変える。

手首から先も、太い爪の生えた人外の手が変わっていた。

「オラアッ！」

白亜ジュラは右腕を振るい、飛来した弾丸ピラニアの群れを、まるで羽虫を払うように吹き飛ばした。

一閃で、何十匹もの弾丸ピラニアが肉塊となり宙に散る。

「うおおお！　出た！　スタイル——《ティラノサウルス》——」

「体を恐竜に変身させる、白亜ジュラの戦闘形態！」

「すげえパワー……」

「大雑把ですが、圧倒的ですな」

流れ弾で飛んできた弾丸ピラニアを沙霧で切り払う。

蘭も、指と指の間にメスを挟んで投擲し、空中でピラニア達を仕留める。

「なるほど……確かに、パワーは一級品だ」

「ウラウラウラウラー！」

海中から次々に飛び上がってくる弾丸ピラニアを、白亜ジュラは変化させた体で薙ぎ払っていく。一方——。

「おっと」

デッキの上で、ヒバナがひらりとステップを踏んだ。

換装した今のヒバナは、西洋風の服に、長い白色のマフラーを首に巻いている。

そして、背中には大きな剣を背負っていた。

古風だが、どこかオーラを感じさせる格好だ。

「気を付けて、音夜君。何かいるよ」

「……ソード・スターフィッシュだ」

一方、音夜の方は、雪国で着るような厚手のコートを纏っていた。

「途轍もない速度で空中を飛び回っている」

「うん、でも躲せない程じゃないよ。ボクが目ならギリ追える」

「……弾丸ピラニア以上の速度だ。普通の人間なら目で追える存在でもないんだが……まあ、お前や——影狼なら見えるのか」

音夜が、チラリと俺の方を見た。

俺もまたヒバナ同様、空中を飛び回るソード・スターフィッシュの攻撃を躲し、そしてすれ違いざまに切り落としていた。

「やはり怪物だな、二人とも。だが、俺は俺のやり方で対処する」

言うと同時に、音夜の両手から白い靄が上がる。

どうやら、それは冷気のようなのだ。

次の瞬間、音夜の周囲を旋回していたソード・スターフィッシュが、空中で凍り付きデッキの上へと落下した。

〈凍った！〉

〈スタイル——《氷使い》。どんだけ速くても、音夜さんに近付いたら一撃で停止だな〉

「ねえ、影狼、影狼」

そこで、ヒバナが俺を呼ぶ。

彼女は既に船の上にはおらず、海上に飛び出していた。

よく見ると、海上を飛び回る弾丸ピラニアやソード・スターフィッシュを足場にして跳躍しながら、背中の大剣を振り回しモンスター達を狩っている。

「これできる？ 一緒に遊ぼうよ」

「……いいだろう」

俺とヒバナの対決を楽しみにしている視聴者も多いと聞く。

ヒバナの誘いに、あえて乗ってやる事にした。

俺も同じように、海中から飛び上がったくるモンスター達を足場に空中で飛び回る。

「アハハ！ やっぱ、影狼ならできると思った！」

〈何何何何ww 何やってんのこの二人ww〉

〈ちょっと何やってるかわかんないですね〉

〈何って、目で追えない程高速で襲い掛かってくるモンスター達を足場にしながら、空中で飛び回ってるだけだろ？ は？ バケモノか？〉

〈この二人だけ次元が違つぞww〉

「あ！ズルいぞお前等！オレも混ぜろ！」
そんな俺達の姿を見て、白亜ジュラも空中に飛び出す。

「んぎゃっ！」

しかし、俺達程の動体視力と俊敏性を持ち合わせていないため、そのまま海に落ちた。

〈何やってんだジュラああ！〉

〈おい、落ちたぞww〉

〈誰か助けてあげてえ！〉

「……仕方がない奴だな」

俺は、海に落下した白亜ジュラの方へ向かおうとする。
その瞬間だった。

「コオオオオオオオ……」

海上を縦横無尽に飛び回り、モンスターを撃墜していく俺とヒバナに、何か波動のようなものがぶつけられた。

「おっと」

「わっ」

ギリギリで直撃を回避した俺とヒバナは、その攻撃の主を見る。
数十メートル先の海上に、数匹の人魚の姿があった。

下半身は魚、上半身は人間の女。

「コオオオオオオオ」

真っ黒な目でこちらを見て、開いた口から歌声を発している。

セイレーンだ。

「気を付けてください、影狼、ヒバナ。セイレーンの歌声は、直撃すると脳まで浸透し、幻覚作用を引き起こします」

デッキの上から、蘭が叫ぶ。

「だ、そうだ、ヒバナ。気を付けろ」

「もう、面倒くさいな」

そこで、ヒバナは空中で身を翻し、セイレーン達の方に右手を向ける。

「邪魔しないでよ」

その右手に光が走った——と思った瞬間、膨大な発光。

稲妻が発生。

放たれた雷が、セイレーンの群れを一気に飲み込み、消し炭へと変えた。

〈ひえええ……やっぱりすげえな、スタイル——《勇者》〉

「なんだかんだ言って、圧倒的なポテンシャルを持ってるからな」
「スタイルガチャSSRだけある」

セイレーンを焼き払ったヒバナ。

その姿を一瞥し、俺は再び船に着地する。

「っと」

「お帰りなさい」

ちようど、玄間さんがいた。

今の彼は、スタイル——《侍》。

その名に相応しい和装を纏っている。

「大事なかったですか？」

「ここまで強力なモンスターが相手では、力を温存している暇もないですね」

襲来する弾丸ピラニアを、居合で切り落としていく玄間さん。

ぼやきつつも、その抜刀の速度はかなりのものだ。

「やべえ……やっぱこの船、やべえよ」

「どいつもこいつも怪物過ぎる」

「なんじゃこのパーティー」

「他のダンジョンなら《中層》クラスのモンスターの群れが、まるで相手になってねえ」

「全七隻の中でも、この船が最速で島に接近してるみたいだぞ」

「っていつか誰か早くジュラを助けてやれよww」

「絶対に優勝者はこの船から出る！ 間違いない！ 外れたら桜の木の下に埋めてくれていいよ」

盛り上がるコメント欄。

確かに現状、この第三艇の戦況は全く問題ない。

そこそこ強力な海棲モンスター達を相手に、苦もなく進行できている。

「陸地ももうすぐですね。影狼、島に上がった後の行動はどうしますか？ 他の船のメンバーとの

合流を優先するのは、距離の関係で難しいと思いますが」

「そうだな」

俺と蘭は、先んじて上陸した後の事を相談していた。

その時だった。

「ん？」

「あれ、第二艇が……」

「お？ どうした？」

「いや、なんか様子が……」

影狼チャンネルのコメント欄に、何やら気になる反応が流れ出した。
第二艇……。

ジミ子さん達の乗っている船だ。

「え、なんだあれ」

「何、どうし……」

「あれ、待って待って、やばいやばいやばい」

「おい、どうした！ 第二艇で何があった！」

「影狼！ ジミ子が！」

「……蘭」

俺は、蘭に声を掛ける。

「はい」

「お前のスマホで……誰でもいい。第二艇の乗船メンバーの配信チャンネルを確認してくれ」

俺は遠く——海原の先へ視線を向ける。

何か……嫌な予感がする。



——時間は、少し遡る。

「ウラァッ！」

有明東京湾ダンジョン、周辺海域へと突入した第二艇。

そのデッキの上では、他の船同様、襲い来るモンスター達との死闘が起っていた。

変身後のアーマー形態で拳を振るうのは、カガッチ。

襲い来る弾丸。ピラニアやソード・スターフィッシュを、空中で打ち落としていく。

「ひゃあ……す、すごい」

「身を隠して、ジミ子ちゃん！ ここはわたくしにお任せですわ！」

《霊能力者》の格好となったジミ子を守るように、《喧嘩師》のメアリーローズが立ちはだかる。

トゲだらけのメリケンサックを振るい、彼女も次々にモンスターを倒していく。

カガッチ、ジミ子、メアリーローズ以外の四人の参加者も同様だった。

流石に、第三艇程楽勝という雰囲気ではない。

皆が少なからず体にダメージを負っている。

それでも、直接攻撃に特化し、タフさが売りのメンバーが揃ったこの第二艇は、弾丸。ピラニア

ソード・スターフィッシュと相性が良かった。

更に――。

「あ、メアリーさん！ ちょっと行ってきますー！」

ジミ子のスキル――ゆうたいたつ【幽体離脱】。

彼女の能力も、手の回らない部分をサポートするのに最適だった。

肉体から抜け出た霊体のジミ子は、遠距離から歌声で攻撃を仕掛けようとしているセイレーンの群れに到達。

一体のセイレーンの体に乗っ取り、仲間に歌声をぶつけた。

突然の仲間割れによりセイレーンの群れは混乱し、戦闘どころではなくなる。

「流石ですわー、ジミ子ちゃん！」

『えへへ……』

セイレーンの体から出た霊体のジミ子は、海の上でメアリーローズに手を振る。

まあ、彼女から霊体のジミ子は見えていないのだが……。

『……え？』

その時だった。

ジミ子は、「その存在」に気付いた。

第二艇の十数メートル先――海の上に、一つの人影があった。

「あ？」

「なんだ、ありゃ」



第二艇のメンバー達も、それに気付く。
海の上に立つ存在。

人の形をしている。

しかし、全身が影のように真っ黒だ。

頭部――顔の位置に、真っ赤な丸い目が二つ並び、第二艇の方を見ている。
その両手の手首から先は、刃のように鋭い形状をしている。

『あれって……』

突如現れた異常。

突如現れた異形。

しかし、その存在を見た時、シミ子にはある人物の姿が重なって見えた。

その異形の立ち姿、雰囲気。

まるで……そう、まるで……。

どこか、影狼のような――。

――次の瞬間、海の上からその異形が姿を消した。

「え？」

そして、気付いた時には――そいつは第二艇のデッキの上に立っていた。

一人の参加者が、遅れて気付き、振り返る。

だが、その時には。

――その参加者の首が切断され、デッキの上に落下していた。

第二話 アンノウン

〈へ？〉

〈は？〉

〈え、何……〉

一瞬、何が起こったのか、誰も理解できていなかった。

第二艇に乗船した参加者達も、彼等の活躍を視聴していたオーディエンス達も。
しかし、直後――。

〈うわ、あああああ！ 首！ 首！〉

〈首斬られた！〉

〈エータが！ エータがやられた！〉

〈なんだ、こいつ！ 速過ぎる！〉

KOD運営公式配信、個人チャンネルの生配信画面。

その光景を目にしていた者達により、コメント欄が阿鼻叫喚と化する。

「な、んだ、よ……」

第二艇——船上。

そのデッキの上に立つ参加者の一人、カガッチは愕然としていた。首を切断され、床に倒れた同乗者。

そして、おそらくそれを行ったと思われる存在が、眼前にいる。

全身真っ黒の人型だ。

その全体像は、まるで黒い炎が燃えているかのようにゆらゆらと揺れている。

両手に位置する部位は、鋭い刃状。

そして、頭部——赤く丸い目が二つ。

——その両目が、カガッチを見た。

「！」

刹那、カガッチは全身が引き攣るような、硬直するような、そんな感覚に襲われた。

体が強張って、足が動かない。

震えが止まらない。

汗が噴き出し、体表を濡らす。

(……なんだ……こいつは)

モンスターなのか？

それとも、それ以外の何か？

全くわからない……だが。

だが、どこか……その存在感に、オーラに、覚えがある。

そう——まるで。

「う、うわあああああああ！」

その時、その異形が存在——仮称で《アンノウン》と呼ぶ事にした——の一番近くにいた参加者が、武器を振り上げて襲い掛かった。

あまりの恐怖、焦燥に、耐えられず動き出してしまったようだ。

「バ……」

カガッチが制止する暇もなかった。

——直後、その参加者の首が宙に舞った。

「ちよ、待て」

「なんだ、こいつ」

「運営、やばいやばい、ヤバイ奴が」

視聴者達も混乱の坩堝に陥っている。

しかしそんな中、アンノウンは肅々と……まるで仕事のよう、己の行動を進めていく。
第二艇——二人目の首が切り落とされた直後、アンノウンの姿がその場から消える。

気付いた時には、三人目の参加者の背後に。

「……はっ!? いつの間にもいい……?」

振り返った三人目の参加者の首が、驚愕の表情を浮かべたままデッキに落ちる。

「う、おおおおおおおおお!」

四人目の参加者が手にした武器——機関銃を構える。

彼のスタイルは《銃兵》——ミリタリー色の強い格好をした探索者だった。

放たれる銃撃。

しかし、弾丸が通過した後は、既にアンノウンの姿はなく。

「あ、へ」

その四人目の参加者の背後にいた……とわかった時には、彼の首も落ちていた。

「ハアッ……! ハアッ……! ハアッ……!」

身動きの一つもできないカガッチは、成り行きを見ている事しかできなかった。

全く目で追えないスピード。

気付いた時には、七人いた参加者の内、四人がやられていた。

残るは――。

「カガッチ様! 動いてくださいまし!」

カガッチに、生き残りの参加者の一人——鈴木メアリーローズが叫ぶ。

彼女のスタイルは——喧嘩師。

喧嘩師には、恐怖や威圧に対する耐性が強いという特性がある。

メアリーは、アンノウンに対して臆する事なく殴り掛かった。

「もう動けるのは、わたくしとあなたしかおりませんわ! シミ子ちゃんは戦えません! わたくし達で倒しましょう!」

現在生き残っているのは、カガッチとメアリー……そして、デッキの上に伏せている黄泉のシミ子。

シミ子は先程、セイレーンの体に乗っ取るために【幽体離脱】をした。

まだ霊体が体に戻ってきていないようだ。

いや……仮に戻ってきたとしても、彼女に近接戦闘のノウハウはない。

「……動け! 動け動け動け!」

カガッチは、頭の中で叫ぶ。

これが最後のチャンスだ。

生死の瀬戸際だ。

今動けなければ、何もできずに死ぬだけだ。

「カガッチ様!」

メアリーがアンノウンに拳を振るつ。

その拳を、アンノウンはゆらゆらと揺れるような動きで躲す。
チャンスだ！

挟撃すれば、倒せる！

スタイル——《ヒーロー》……スピード特化の《バイク・フォーム》にフォームチェンジし、敵の背後に回り込め！

……………

そう、頭ではわかっている。

わかっている、のに……カガツチの体は、動かなかった。

純然たる恐怖心を植え付けられてしまったからだ。

「カガツ——」

メアリーが叫ぶ。

その直後——アンノウンが彼女の横を擦り抜ける。

「！」

——鈴木メアリーローズの首もまた、すれ違いざまに目にも留まらぬ速さで切り落とされた。



『メアリーローズさん！』

セイレーンの体から霊体を脱出させ、ジミ子は大急ぎで船の方へと戻ってきていた。

しかし、もうすぐそこまでというところで——彼女の目に映ったのは、首を刎ねられる鈴木メアリーローズの姿だった。

——同じ船になれて嬉しいですね、ジミ子ちゃん！

彼女の優雅で屈託のない笑顔が、脳裏を過る。

『うう……わあああああああ！』

霊体のジミ子は、そのままの勢いで謎の存在——アンノウンに突撃する。

相手が生命体……モンスターであれば、このまま体に乗っ取り操る事ができる。

メアリーの敵討ちに、ジミ子は闘志を燃やしてアンノウンの体に飛び込んだ。

——直後、ジミ子の霊体は、アンノウンの体から弾き出された。

『……!? え……!?』

【幽体離脱】を使用してきて、初めての体験だった。

相手が無機物であるなら、素通りする事もある。

だが、体から「弾き出された」というのは、初めての事。

『まさか……あたしの能力でも体に乗っ取れないくらい、圧倒的なレベルの存在………っていつ事?』
そう思う根拠は、ある。

例えば、影狼。

もしもジミ子が【幽体離脱】を用いて影狼の体に乗っ取れるか、と問われたなら、否と答えるだ

ろう。

実際にやってみたわけではないが……直感的にそう思わせる程の何かが、影狼にはあるのだ。つまり、このアンノウンは影狼と同じくらい存在……。

いや、違う。

自分は先程、このアンノウンを見てすぐに思ったじゃないか――。

その立ち姿、その風格。

まるで、影狼と同じだ――と。

その時だった。

大きな波が第二艇を襲つた。

激しく揺れる船艇。

ジミ子の小さな体が、無抵抗のまま宙に投げ出された。

『あっ!』

霊体のジミ子は、慌てて自分の肉体を追い掛ける。

その伸ばした手が、自身に触れるか触れないか、というところで――。

――ジミ子の体は波に飲み込まれ、海中へと沈んでいった。



「ハアッ……!! ハアッ……!! ハアッ……!!」

メアリーローズも倒され、ジミ子の体は海に落ちた。

第二艇のデッキの上に残ったのは、カガッチのみ。

そしてアンノウンは、真っ赤な目をカガッチに向けて立っている。

〈カガッチ動け! 戦えよ!〉

〈いつもの威勢はどうしたんだ!?〉

〈っていうか、もう逃げようよ!〉

〈ザマァ!ww 飯がウマイ!ww〉

〈運営何してんの!? もうカガッチ戦意喪失してるって!〉

〈まだ降参してねえだろ! やれるよな、カガッチ!?〉

カガッチの個人配信――《カガッチofficial》のコメント欄も、大混乱と化している。

普段ならコメント一つ一つを気に掛けるカガッチだったが、今はもうそんな余裕はない。

殺される。

無抵抗で、何もできなくて。

圧倒的な実力差のある相手に、為す術なく。

「た……」

スタイル——ヒーロー。

その変身能力によるアーマーは、既に時間切れで解除されている。
通常の換装姿となったカガッチは、ただ震えてアンノウンと対峙する事しかできずにいた。
「助け……」

アンノウンが目前に迫る。

まるで何も感じていないかのように、カガッチに迫る。

ああ、殺される。

一瞬後、自分の首も切り落とされる。

恐怖と絶望を抱き、カガッチは両目をギュッと瞑った。

〈え、なんだって？〉

〈何々？ 第三艇？〉

〈影狼が？ え、嘘〉

〈おい、マジかよ〉

その時だった。

アンノウンの動きが、ピタリと止まる。

「……？」

来ると思っていた一撃が来ない。

カガッチは、恐る恐る涙で潤んだ両目を開ける。

アンノウンは、カガッチではなく真横を見ていた。

大海原の方向を……あたかも、そこから何かが迫り来るのを感じ取ったかのように。

〈影狼だよ！ 第三艇から第二艇に向かってる！〉

〈どうやって!?〉

〈だから、「飛んで」だよー〉

〈はあ!? www なんて!?〉

〈白亜ジュラに、自分を思いきり投擲させたんだ！〉

カガッチは気付いた。

明らかに、アンノウンの気配が変わった。

自分達を相手にしていた時は、まるで羽虫を潰している程度の雰囲気しか感じ取れなかったのに。
今、アンノウンは、明確に「警戒」をしている。

——刹那、まるで砲撃のように飛来した存在が、アンノウンに激突した。

襲来した高速の存在は、両手の剣——沙霧を真正面から叩き込む。

その攻撃を、両の刃を重ねて防御したアンノウン。

「お前が何者かは知らないが」
アンノウンを巻き込み、海上に飛び出しながら。
飛来した存在——影狼は言う。
「ジミ子さんが心配だ。早急に片付ける」

第三話 影狼VSアンノウン

『影狼、これは……』

『……………』

第三艇のデッキにて。

俺は、蘭のスマホに映されたカガッチのチャンネル——カガッチ official……そのカ
メラの前で起こっている惨劇^{さんげき}を目の当たりにしていた。

第二艇を襲う謎の異形。

その異形の手により、瞬く間に倒されていく参加者達。

そして、海へと弾き出されたジミ子さんの体。

『何何？ 他の船でなんかあったの？』

『なんだ？ 敵か？ どこにいる？ ぶちのめしに行くぞ』

『第二艇が襲われている。ほぼ全滅だ』

音夜の持つスマホの画面を覗き込むヒバナと白亜ジュラ。

『この異形……一体何者だ。モンスターか？』

『俺の記憶の中にも該当する存在がいません。一体……影狼？』

音夜と蘭が、画面の中で猛威を振るう存在——黒色の異形に関して意見を摺り合わせる。
しかし、そこで俺は既に動いていた。

第二艇が進んでいるであろう方角と進路を予測し、そこまでの距離を測定。

そして。

『白亜ジュラ。協力してくれ』

『ん？ なんだ？』

『あっちの方角に向かって、俺を思いきり投げろ』

俺の発言に、音夜も蘭も驚いて目を丸くしている。

『正気か？ 何を考えている、影狼』

『影狼、敵の存在は未知数です。それにこの広大な海原を、いくら白亜ジュラの怪力があるからと
いつて、投擲で横断するなど……』

『よし、任せろ！』

音夜や蘭の言葉を余所に、白亜ジュラは俺の意思通りの行動を取ってくれた。
俺の腕を掴む白亜ジュラ。